

地域在住高齢者と繰り返し交流することによる

看護学生の学びの変化

——生涯健やか看護学実習Ⅰ(体力測定)での 取り組みを通して——

深山つかさ・征矢野あや子・足立真実子
座光寺佑樹・竹中友希・松本賢哉

Ⅰ. はじめに

高齢化が進行する一方で、単身世帯や核家族が増加し、子どもが様々な世代と交流する機会が減少している現状がある。その結果として佐藤(2006)は、子ども世代は高齢者世代との間のダイナミックな相互依存関係を通して高齢者の身体的、心理的、社会的状況を適切に評価しにくい状況におかれていると指摘している。つまり、現代の看護学生は、高齢者とのコミュニケーションをとる機会の減少により高齢者の多面的な理解が不足していることが予測される。実際、看護の対象となる人々の生活に視点をおくことは、看護基礎教育で非常に重要だが、世代間交流が少ない学生は高齢者の生活がイメージできず、援助を考えることが難しい(松本、2021)とも言われている。したがって、現代の看護学生が対象者の生活を想像して看護を考える力を養うことが重要であると考えられる。

同様に、仁平ら(2022)は、看護学生が将来高齢者のニーズを適切に捉えることのできる高齢者看護の実践者となるためには、多様な価値観を持つ高齢者を多角的側面からアセスメントする力を得て、「生活者」として高齢者を理解することが望まれると述べている。その点において看護学生と高齢者との世代間交流に関しては、看護学生にとって高齢者への理解と尊敬、高齢者がもつ知恵の大切さへの感知につながったり(張ら、2014)、【活動を通して高齢者の強さを感じるができる】(仁平ら、2022)などといった効果が示されており、重要なものであると考える。

本学ではカリキュラム内に生涯健やか看護学実習Ⅰ(以下体力測定実習)として、看護学生が地域在住高齢者と繰り返し交流する機会を持っている。この体力測定実習の目的は「地域で暮らす高齢者とかかわり、人の成長発達・健康・生活・環境の視点から高齢者を理解し、その健康を支える上で必要な健康課題をアセスメントするための基礎的能力を養う」であり、地域で生活を営む高齢者との関りを通して、世代間交流の意味も踏まえ学生に様々なことを学んでもら

うことができると考えている。また、本体力測定実習では、複数回に渡り高齢者と交流の機会を持てるため、学生の学びは回を重ねるごとに変化するのではないかと考えた。

世代間交流についての取り組みは、幼児と高齢者を対象としたものが多くみられるが、看護学生と高齢者といった若者との交流に視点を置いたものはまだ多くはない。特に、正規のカリキュラムに位置づけた世代間交流を通しての、学生及び高齢者双方にとって実りある成果を得られるかについてはこれまで明らかになっていない。したがって、本研究を通して、より良い実習の在り方について検討することは、普遍性や継続性の高い世代間交流の在り方を考える機会となると考える。

そこで、看護学生が繰り返し地域在住高齢者と関わる中での、高齢者の多面的な理解や生活での困りごとについての理解の変化を明らかにし、より学びを深めることができ、世代間交流を活かしたよりよい実習のあり方を検討することを目的に、本研究に取り組むこととした。

II. 研究課題と研究目的

高齢者と交流する機会が増えることで看護学生(以下学生とする)が把握する高齢者の多面的な理解に関する自己評価は高まるかを研究課題とし、その結果に基づき、より学生が学びを深めることができ世代間交流を活かしたよりよい実習のあり方を検討する。

III. 体力測定実習内容

学生はA市や、本学で開催する体力測定会に3回参加し、測定をサポート(血圧測定、骨密度測定、握力、10m障害歩行、開眼片足立ちなど)を行いながら高齢者とコミュニケーションを取る。半日の実習で高齢者と交流する時間は1時間～2時間程度である。学生には実習終了ごとに実習目標に沿った振り返りのレポートを記載してもらった。

IV. 研究方法

学生の自己評価の二次分析を行う形で進めた。具体的には以下の通りである。

1. 収集データ

収集したデータの1つ目は「体力測定実習自己評価」である。2022年11月から12月に開催された体力測定への参加前と参加の都度1週間以内に、学生が学内システムにあるアンケートフォームに提出した。体力測定実習自己評価は、高齢者の体力測定参加前、各体力測定参加後の計4回、学びの達成状況について「0. まったくできなかった」～「4. とてもできた」の5段階で自己評価した。

各問は実習目標に沿って以下の通りに設定した。

- 問1. あなたは高齢者の成長発達や身体的な加齢変化についてどの程度理解できていると思いますか。
- 問2. あなたは高齢者の成長発達に応じた認識や感情を含めた心理的变化についてどの程度理解できていると思いますか。
- 問3. 高齢者の成長発達に応じた社会的な役割変化についてどの程度理解できていると思いますか。
- 問4. あなたは高齢者が生活する上での日常生活の困り事についてどの程度理解できていると思いますか。
- 問5. 高齢者の抱える健康課題が普段の生活に与える影響についてどの程度理解できていると思いますか。

収集したデータの2つ目は、問4に関して高齢者の日常生活の困りごととして学生がとらえた具体的な内容である。アンケートフォームに自由記載欄を設け記載してもらった。

2. 分析

体力測定実習自己評価の変化について、フリードマン検定を行った(統計解析ソフトIBM® SPSS® Statistics 27.0)。また、設問ごとの経時的な変化について多重比較を行った(統計解析ソフトR)。統計学的有意水準はともに5%未満とした。また、問4の自由記載についてはテキストマイニング(分析ソフト:見える化エンジン)にて定量、定性的に分析した。

3. 倫理的配慮

研究参加の自由意志を尊重すること、成績への影響の懸念を避けるため成績付与完了後、オンライン授業アプリケーションでオプトアウトの文書を掲載するとともに、科目終了時に別途口頭で説明した。オプトアウト後研究への不参加を表明した学生はいなかった。また、個人情報の保護として、レポート課題は匿名化するため学籍番号・氏名を削除し、本文中に学生や高齢者の特定につながり得る情報があれば記号に置き換えた。研究開始前に京都橘大学研究倫理委員会の承認を得た(承認番号22-15)。

V. 結 果

研究対象データは106件であった。設問ごとに、体力測定参加前と参加後についての変化とその有意差を確認した(表1・2、図1～図5)。また、各回の有効回答数は参加前(0回目)103名(97.2%)、1回目88名(83.0%)、2回目73名(68.9%)、3回目85名(80.2%)であった。

表1. 各設問の中央値と四分位範囲

	中央値(四分位範囲)				
	問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
参加前	2(2-2)	2(1-2)	2(1-2)	2(1-2)	2(2-2)
1 回目	2(2-3)	2(2-3)	2(2-2.5)	3(2-3)	2(2-3)
2 回目	3(2-3)	3(2-3)	2(2-3)	3(2-3)	2(2-3)
3 回目	3(3-3)	3(2-3)	3(2-3)	3(2-3)	3(2-3)

表2. 学生が行った自己評価項目の各参加回数による比較

	問 1			問 2			問 3			問 4			問 5		
群間比較	χ^2	p 値		χ^2	p 値		χ^2	p 値		χ^2	p 値		χ^2	p 値	
0-1	64.00	*	0.18	45.00	*	*	50.00	*	*	44.00	*	*	41.00	*	*
0-2			*			*			*			*			
0-3			*			*			*			*			
1-2			*			0.48			0.39			0.61			0.57
1-3			*			0.12			*			0.74			*
2-3			0.29			0.87			0.40			1.00			0.33

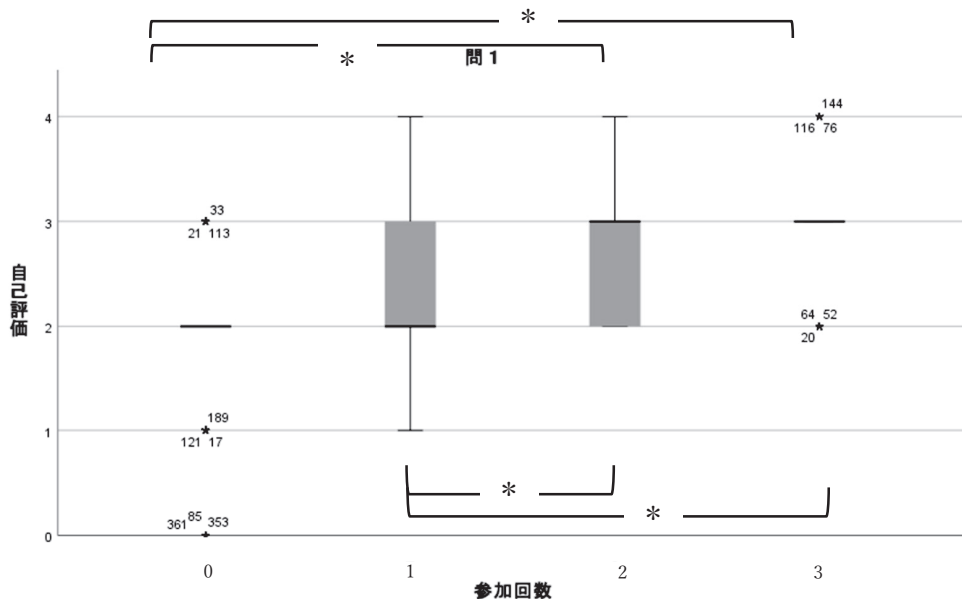


図1. 身体的加齢変化についての理解の自己評価の経時的推移

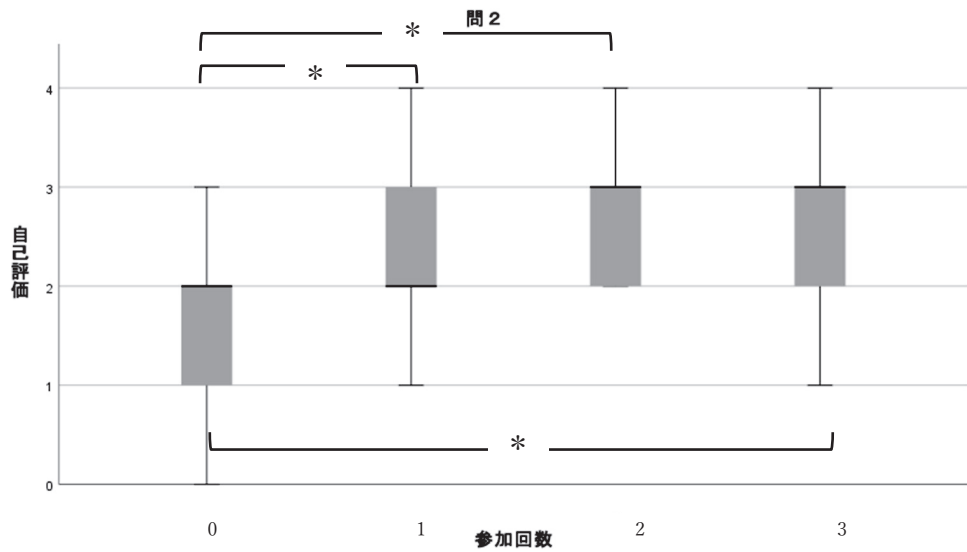


図2. 心理的变化についての理解の自己評価の経時的推移

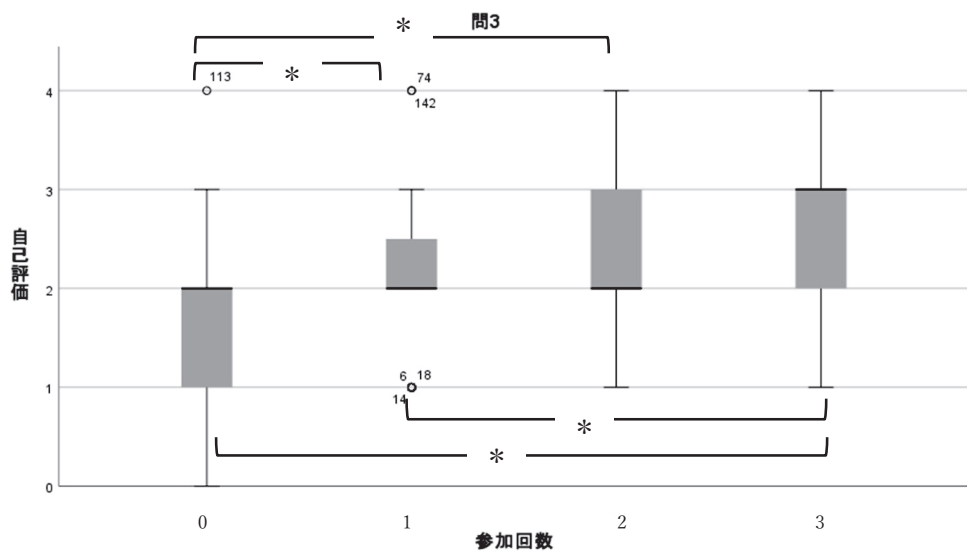


図3. 社会的な役割変化についての理解の自己評価の経時的推移

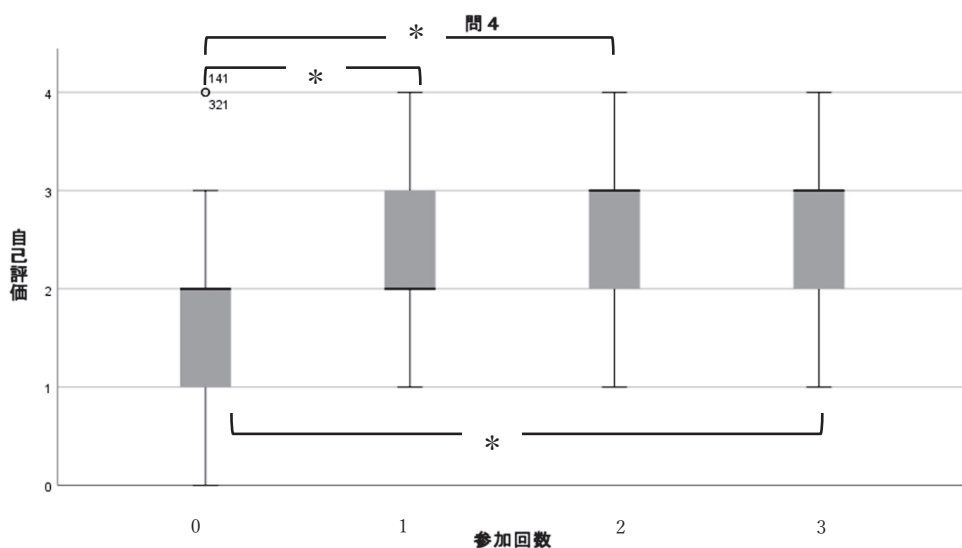


図4. 生活する上での困りごとに関する理解の自己評価の経時的推移

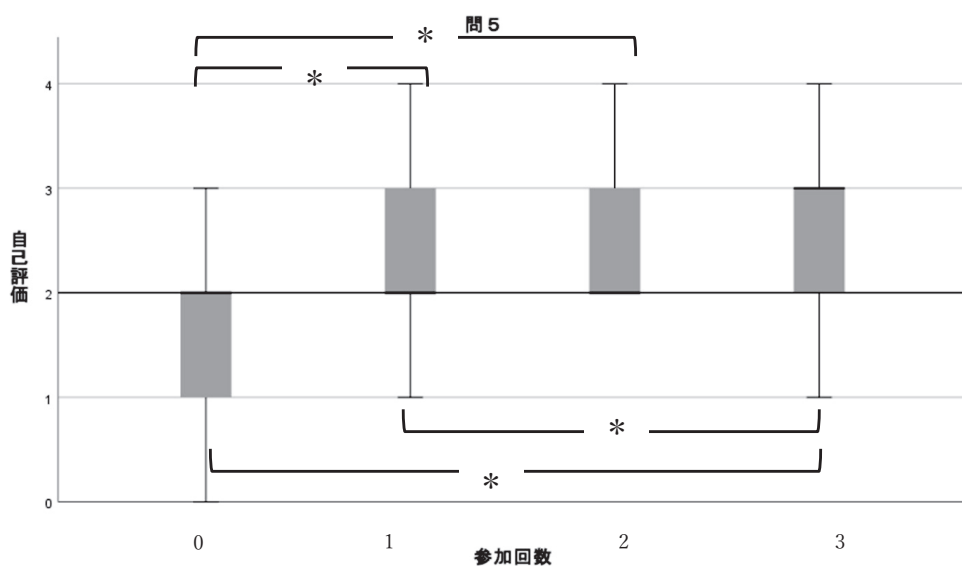


図5. 健康課題が普段の生活に与える影響の理解についての自己評価の経時的推移

1. 各設問の中央値の推移と各回における有意差について

中央値に関してしてみると、参加前から1回目に関して、問1以外の項目において、参加前と比べた自己評価が有意に上昇した。問1に関しては、1回参加するだけでは自己評価の有意な上昇はみられなかったが2回参加することにより有意に上昇した。また、1回目から2回目については、問1のみ有意に自己評価が上昇したが、それ以外の問に有意な上昇は見られなかった。1回目から3回目については、問1、問3、問5で有意に自己評価が上昇したが、そ

れ以外の問いに有意な上昇は見られなかった。2回目から3回目についてはどの問でも有意な上昇はなかった。

2. 学生がとらえた高齢者の日常生活の困りごとについて

自由記載については各回の比較が困難なため、0回目～3回目の回答を統合して分析した。分析件数は432件であった。学生が捉えた高齢者の日常生活の困りごととして抽出された上位10の掛かり受けキーワードを表3に示す。なお、見える化エンジンを用いて分析した結果に加え、研究者が同様の意味だと判断した係り受けは統合した。1位は「耳—聞きにくい」「音—聞きにくい」(20件、4.7%)、2位は「時間—かかる」(15件、3.5%)、3位は「荷物—重い」「重い—持つ」(12件、2.8%)、同じく3位は「膝—痛い」(12件、2.8%)であった。

表3. 学生が捉えた日常生活の困り事 上位10掛かり受け単語 抽出結果

No.	係り受け		件数	割合
1	耳 - 聞きにくい、音-聞きにくい	耳が聞こえづらい。	20	4.7 %
2	時間 - かかる	足が悪くて座るのに 時間 が かかる。	15	3.5 %
3	荷物 - 重い、重い-持つ	重い荷物を運ぶのが大変である。	12	2.8 %
3	膝 - 痛い	膝が痛い。	12	2.8 %
5	腰 - 痛い	朝起き上がるときに腰と膝が痛いこと。	10	2.3 %
6	床 - 座る	床に座ってから立つまでの体力がいる。	9	2.1 %
7	音 - 聞きにくい	耳が聞こえにくいいため、周りの音が聞こえにくい。	8	1.9 %
8	足腰 - 弱い	年齢を重ねていくごとに足腰が弱くなってしまう。	8	1.9 %
9	体 - 動かしにくい	足腰が弱くなり、思うように身体を動かすことが出来ない。	7	1.6 %
10	動作 - 難しい	段差などが膝が痛いとしりづらいなど動作が難しい。	7	1.6 %

1位の「耳—聞きにくい、音—聞きにくい」は聴力の低下を困りごととして捉えていた。

2位の「時間—かかる」については、その具体的な内容を捉えるため、関連するキーワードを調べた。係り受け自体の共起ネットワークでは十分な関係を把握できなかったため、それぞれの単語についての共起ネットワークも調べた(図2、図3)。その結果「時間」という単語では「かかる」意外に生活の困難さに関する関連が見出せなかったが、「かかる」という単語では、「座る」ことや、「作業」などに時間がかかるということに加え、膝、腰への「負担」がかかることに関する困りごとを捉えていた。

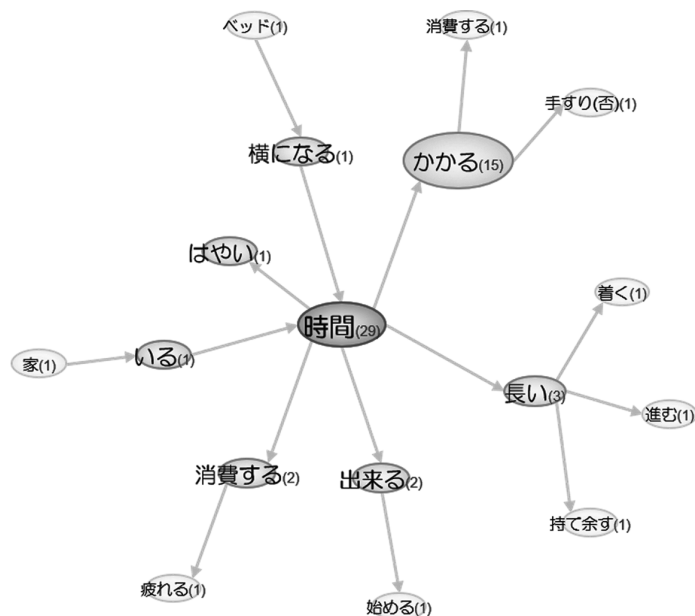


図6.「時間」共起ネットワーク図

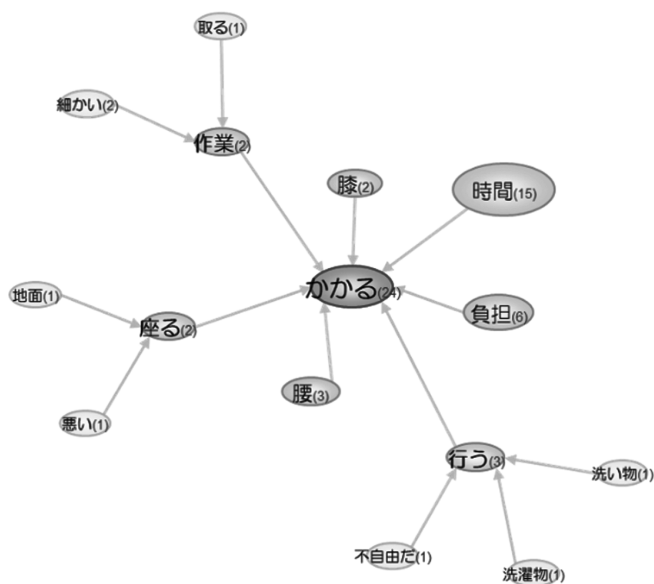


図7.「かかる」共起ネットワーク図

3位の「荷物—重い、重い—持つ」についても係り受け自体の共起ネットワークでは十分な関係を把握できなかった。そのため、それぞれの単語についての共起ネットワークも分析した(図8)。その結果、「重い」の共起ネットワークから、「荷物」の共起ネットワークも関連して抽出された。そこでは「ゴミ」「家事」という単語と関連しており、荷物を持つことや、ゴミ捨てなどの家事での重いものを持つことの困難さを捉えていた。

ため、その間に様々な授業が入る中での継続した学びをすることは難しいと考える。

これらの課題に関して、基本的に学生の主体性を尊重した実習スタイルではあるが、学生が目標を意識し、学びを深めながら実習に取り組むために教員の働きかけは重要であると考え。学生は事後課題として実習終了ごとに学びのレポートを記載していたが、次の実習までに教員がフィードバックを返すことができていなかった。綱木ら(2017)は、振り返りの思考が深まらない要因としては、振り返り用紙を学生へ返却せずに授業ごとの単発的なものとしているため学生が記述内容を継続的に自己の振り返りとして用いることを難しくしていると述べている。このことから、実習終了後から次の実習までに教員から実習の学びに対するレポートへのフィードバックを行う必要があると考える。そして、学生が自己の課題を明確にすることによって、各回の課題を次の回につなげて学びを深めることができるのではないかと考える。

また、もう一つの視点として学びの深まりについての捉え方である。習得した看護の知識や技術について思考を深めるには、その知識や技術についての考え方や捉え方を多様にする必要があると言われている(和賀、2019)。高齢者といっても十人十色であり、各設問の学びの具体的な内容には様々なものが考えられる。特に問4の日常生活の困りごとについては、本当にひとくくりにはできない多様性があると考えられる。したがって、繰り返し体力測定に参加し、複数的高齢者と交流することによって一人の高齢者からでは捉えきれなかった多様な視点を持ち視野を広げる機会になっていると考える。そういった意味では、各設問は「あなたは高齢者の〇〇について多様な視点で理解できましたか」という設問にすることで、学びの深まりを評価できるのではないかと考える。

そして表2から、学生は体力測定実習で高齢者とかかわることを通して、身体機能の加齢変化に注目していることが分かった。実際、加齢に伴い感覚機能系の機能低下として老年性難聴や白内障による視聴覚の低下、運動器系機能の低下として関節軟骨が硬化したり関節周囲の組織も変性が生じる。それらの点は日常生活動作(ADL)が関連づいて「時間がかかる」ことや、「耳が聞こえにくい」「膝が痛い」というところで高齢者自身が自覚し表出できることや、観察を通して実感しやすい。そのため、日常生活での不自由さを「困りごと」として捉えやすいことが考えられた。

この体力測定実習の前に、1回生は座学を通して高齢者の身体、心理、社会的変化や発達課題を学び、それらの変化について高齢者疑似体験を通して学んでいる。実際に高齢者と交流する中で身体、心理、社会面の変化や、日常生活での不自由さについてリアリティをもって理解できたと考える。ただ、日常生活の困りごとについて、「荷物ー重い」「ゴミー重い」というところまで捉えられた学生もいたものの、多くの学生が高齢者の様々な日常生活にまで想像を広げ意味づけることはできていなかった。深い学びは知識を他の知識や考え、経験と繋いだり関連づけたりする有意味学習を基本的には指す(溝上、2021)と言われている。高齢者疑似体験の学びを深めるためには身体的加齢変化を高齢者の生活とを意味づけられるような助言や、より生活の大変さをイメージできるようゴミ捨てや高いところの電球交換などの項目を追加すると

いった工夫ができるのではないかと考える。さらに、体力測定実習に向けてのオリエンテーションでは、高齢者とのかかわり方や生活の見方について知識と経験が意味づけられるようあらかじめ助言をすることでさらに理解が深まる可能性があると考ええる。

一方で上記のような身体機能の変化から、社会と繋がる機会が減少したり、生きがいや喜びの喪失というような日常生活への影響に関する心理、社会的な視点についての困り事は捉えることができていなかったと考える。しかし、看護を学び始めた1年生の段階から高度な目標を求め達成することは困難であるというのは容易に想像がつくことである。したがって、1年生だけで目標達成を目指すのではなく、今回の学びを積み重ね4年間を通じて目標を達成できるように継続した学習支援が重要であると考ええる。この視点において、本学看護学部では「生涯健やか看護学」という視点で1回生から4回生まで継続して講義や演習、実習を行っている。具体的には1年生での学びや経験をふまえ、2年生では地域の高齢者施設を利用する1人の高齢者を受け持つ実習を行っている。そして、3年生では地域在住高齢者の自宅へ伺い困りごとを支援する「看護お助け隊演習」や訪問看護ステーションで長期的に利用者に対する看護を展開する実習を行うなど地域や在宅で生活をする高齢者を多面的に理解し、適切な支援を行う実践力を養うために、順序性を持ったカリキュラム構成となっている。したがって、長期的なカリキュラムを通じて継続して学んでいけるようにそれぞれの実習を関連づけて学習を支援し、各学生が目標を達成していけるようにすることが大切である。

次に、世代間交流という意味でこの実習を振り返る。この体力測定を通して学生は高齢者から様々なことを学んでいる。高齢者は、学生よりもはるかに豊富な人生経験と知識を持っており、それを学生に継承してくれる。高齢者は、他者からの保護や援助の対象者としてみるだけでなく、英知を持って社会に貢献する一員であり、その役割を発揮できるような機会の提供や環境整備が重要であるといわれている(大淵、2023)。そのことを踏まえると、この体力測定実習は、高齢者が学生に英知を継承する機会を提供していると言える。この実習をより良い交流の機会とするためにも、高齢者と若い世代(学生等)がお互いに教える側、学ぶ側という立場に立つことを取って強みと捉え、高齢者に対しては若い世代(学生等)の特徴について情報提供を行ったり、若い世代(学生等)には、高齢者が一般的に「若者」にどのようなイメージを持ち、どのような振る舞いを期待しているかを説明するなど、お互いが役割を果たしながら、win-winな活動となるような工夫も必要だと考える。

VII. 結 論

地域在住高齢者と繰り返し交流することによる看護学生の学びとしては、各回ごとに有意に平均点が上昇するわけではなかったが、参加前と3回目ではすべての設問で有意に自己評価が高かった。基本的に学生の主体性を尊重した実習スタイルではあるが、学生が目標を意識し、知識と経験が意味づけられるよう、オリエンテーションの工夫や記録のフィードバックなど教

員の働きかけは重要であると考え。また、各設問は「あなたは高齢者の〇〇について多様な視点で理解できましたか」という設問にすることで、学びの深まりを評価できるのではないかと考える。高齢者と若い世代(学生等)がお互いに教える側、学ぶ側という立場に立つことを敢えて強みと捉え、お互いが役割を果たしながら、win-win な活動となるような工夫も必要だと考える。

VIII. 本研究の限界

本研究は、学生の自己評価であり、学生それぞれの学びを客観的に測定したわけではないため各問の理解状況の質を含めた学びまでは明らかにできていない。今回は学生のための自己評価であったが、今後は参加高齢者からの評価も確認しながら、学生と高齢者双方にとってより良い実習となるように考えていきたい。

なお、本研究は、令和4年度厚生労働省老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業、若い世代(学生等)による高齢者の生活支援に関する調査研究事業報告書に報告した「Ⅱ 基礎調査3. 看護お助け隊の授業とお助け隊演習・・・必修お助け隊演習における学生の意識とその意義」に、加筆修正したものである。

また、日本世代間交流学会第14回において発表したものを一部加筆修正したものである。

謝辞

データ分析過程において健康科学部救急救命学科平出敦教授には様々なご助言をいただきました。厚く御礼申し上げます。

文献

- 張平平, 大塚真理子, 辻玲子, 畔上光代, 丸山優, 善生まり子(2014): 看護学生と地域高齢者との世代間交流がもたらした成果 文献研究を通して, 埼玉県立大学紀要, 15, 43-51.
- 溝上慎一(2021): 溝上慎一教育論(理論)深い学びとは [http://smizok.net/education/PDF/PDF00024\(deep%20learning\).pdf](http://smizok.net/education/PDF/PDF00024(deep%20learning).pdf)
- 松本賢哉(2021): 看護学生の能動的学修に向けて人々の生活を実感する学び, 看護教育学会誌, 13(2), 69-72.
- 仁平利沙, 渡辺陽子, 品川祐子, 山中道代(2022): 看護学生と高齢者との世代間交流の効果と活動内容についての文献研究, 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌, 22(1), 53-64.
- 大淵律子(2023): 第1章4節1 高齢者にとつてのQOL, 堀内ふき・諏訪さゆり・山本恵子編, ナーシング・グラフィカ老年看護学①高齢者の健康と障害(第7版), メディカ出版, 大阪.
- 佐藤敏子(2006): 老年看護学教育において世代間交流を学ぶ意義, 老年看護学, 10(2), 77-84.
- 網木政江, 久野暢子, 藤澤怜子(2017): 基礎看護技術教育で学生の学びの深まりを促す教育的介入策を探る一振り返り用紙の分析一, 山口医学, 66(2), 113-122.
- 和賀徳子(2019): 第IV章学習理論と学習方法 2 学習方法 A期待される学習, グレック美鈴, 池西悦子編, 看護教育学(改定第2版)看護を学ぶ自分と向き合う, 南江堂, 東京.